
【主題】 病弱学級のオンラインによる『繋がり』から学び合う学校生活

【副題】 ～病弱学級での ICT を活用した取り組みを通して～

【学校・団体名】 兵庫県明石市立大久保北中学校

【役職名・氏名】 教諭 中安 静香

【Ⅰ】 現状と課題

近年、公立中学校における市内の特別支援学級は増加傾向にあり、支援が必要な生徒への理解が学校現場でも徐々に浸透している。だが、障害の種別ごとに分類すると、病弱学級は、数が少なく、そこに在籍している生徒の病状や症状のレベルは多種多様であり、医学的な知識や理解も時には必要となる。そのため、学級担任や学校組織は、生徒の現状をしっかりと把握した上で、必要な支援をしなければならない。

しかし、病弱学級を開設、受け持つ機会は数少なく、初めて病弱学級を開設する学校や担任を受け持つ教師は、施設整備や授業形態、生徒同士の交流方法など様々な点で疑問を抱く。他校の取り組みを視察しても生徒の病状によって必要となる支援が異なるため、すべてを網羅できるわけではない。

また、通常校でのオンラインによる授業や学校生活を送っている事例は少なく、教師側の準備や負担だけでなく、生徒側の協力や準備等も必要となる。

そのため、本研究では、病弱学級では必要不可欠な ICT 活用の活動をまとめ、今後の病弱学級の開設・運営の参考、また ICT 活用の発展になればと思い、取り組みを報告する。

【Ⅱ】 具体的な ICT の活用

(1) オンライン授業をおこなう背景

本校の病弱学級は、2022 年度から 2024 年度の 3 年間開設された。在籍生徒は 1 人のため、個人が特定されないよう詳細はふせさせてもらうが、感染症や発作によって命を落としかねない症状があった。そのため、集団での活動では、感染リスクが高く、教室に入っただけで授業を受けることは困難であった。また、毎日通学し、一日すべてを通して学校生活を送ることも体調や体力的な面で厳しかったため、生徒の学習保障を確保する支援が必要であった。このような状況や医師からの病状説明等を受け、オンラインでの双方向型授業とオンデマンド型授業を取り入れた学校生活を送る経緯に至った。

(2) オンライン授業に使用した ICT 機器やアプリ等

オンラインでの授業をおこなうにあたり、教室と生徒の自宅をつなぐために、教師用タブレットと生徒の自宅パソコンに ZOOM と Google Meet のアプリを活用した。基本的には、ZOOM を活用していたが、電波状況やアプリの更新などオンラインならではの不具合が生じることが度々あったので、常時 2 つのアプリを使えるようにした。市教委から配布される教師用・生徒用タブレットは、取り込めるアプリが市によって異なるため、規制や使いやすさ、それぞれのアプリのメリット・デメリットを理解して取り入れてもらいたい。

また、明石市では授業用アプリとして、ロイロノート・スクールを活用している。ロイロノート・スクールでは、出欠や健康調査、授業に必要な資料やプリントの配布や提出、グループでの意見交換や協働作業、生徒が動画や資料の作成ができるなど学習に必要な要素を取り入れたアプリとなっている。

他にも、オンライン授業で必要となる機器には、マイク & スピーカーがある。教室内の音声を拾いやすくなるだけでなく、生徒が発表する声が教室にも届けることができた。さらに、体育館や教室外だけでなく校外での行事等でネットワークが接続されていない場所での活動では、モバイルルーターが必須となる。明石市では、市教委に申請を出すと貸出をしてもらえるので、行事の度に貸出をしていただいた。

(3) オンライン授業の様子

《病弱学級での授業》

病弱学級では、学級担任と生徒でオンラインを繋ぎ、マンツーマン授業となった。支援学級に設けられている自立活動の時間では、生徒が将来の生き方や、心と体のケアや自分の病気への理解を深めるために、画面越しではあるがコミュニケーションを多くとり、未来に向けてどのような学習が必要なのか、今、目の前の困難を解決するためにどのような学習が必要かを見極め、生徒の課題解決に向けて授業を計画した。

例えば、交流学級での家庭科の授業でユニバーサル

デザインの学習をし、その応用として、実際に自分の体に合ったスカートをデザイン・採寸・裁断・縫製をおこなった。

オンラインを通して、実習の様子を確認し、指示することは可能ではあるが、作品の細部の確認が画面上では難しく、また、ミシン操作や力加減などの技能部分に関わる感覚的などころを伝えるには、非常に難しい場面が見られた。採寸など生徒一人ではできない場面では、保護者の手助けが必要となった。

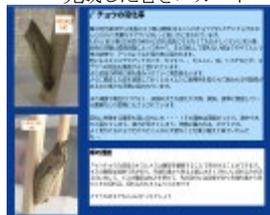
他にも、調べ学習や作業の時間では、ロイロノート・スクールの機能を活用し、調査・レポート作成・プレゼン発表の準備をおこなった。発表当日に体調や機器の不備が生じても対応できるように、動画で発表内容を録画しておいた。



生徒のデザイン画



完成した巻きスカート



アゲハチョウの成育記録

《交流学級での授業》

交流学級での授業では、教卓の近くにオンライン用のタブレットを配置し、教科担当が生徒の表情や発言を把握しやすいようにした。また、前方に置くことで、生徒が板書を写しやすいように配慮した。他にも、光の反射加減や音の入り具合を確認し、授業の妨げにならないよう配慮した。授業中のオンラインに関わるトラブルが生じた場合は、ZOOMのチャット機能を使用し、他の生徒の妨げにならないようにした。生徒が授業を滞りなく受けるために、教科担当には、授業で使用するプリントを事前に準備してもらい、オンラインでも同時に学習できるようにした。万が一、プリントの準備が間に合わなかった際は、プリントの画像をロイロノート・スクールで送り、タブレット上でプリントに記入してもらった。また、オンラインの授業での課題の一つに、電波状況の悪さがある。これに対応するために、病弱学級の担任が教室後方からロイロノート・スクールで授業を録画し、生徒に送ることで、授業が途中で止まっても見直すことができた。また、体調不良で授業を受けられなかった時もオンデマンド型授業として授業を受けることができ、生徒の学習を保障す

ることができた。

授業後の休み時間では、次の授業の妨げにならない程度にオンラインを繋げたままにし、教科担当の教師への質問や課題や配布プリントの確認をおこなうなど、少しでも他の教師とのコミュニケーションを増やし、教師との関わる時間を増やした。もちろん、交流学級のクラスメイトとの関わりも自然と増えるように、病弱学級の担任がクラスメイトへの声かけや仕掛けを工夫した。



休み時間の様子

《小テスト・考査》

交流学級で授業を受けている教科の中には、授業内に小テストがある。小テストの際は、病弱学級の担任がオンラインでテストを受けている生徒の様子を確認し、テストが終了したら、生徒は回答した小テストを撮影し、担任に送る。その後、担任が採点したものを教科担当に渡すという方法で対応した。

学期末考査に関しても同じように行い、テスト問題と解答用紙は厳封して、テスト当日の朝に渡し、オンライン上でテスト開始の合図とともに開封させ、終了後は、記入済みの回答用紙を写真に撮り、ロイロノート・スクールに送信させるようにした。この方法では、不正行動を完全に防ぐことはできないが、生徒の信頼をもとに小テストも考査もおこなった。生徒にとっては、オンラインでも授業とは違う緊張感を持って、受験することができた。



考査の様子

(4) 学びの様子

《協働学習》

オンライン授業でも協働学習をおこなうことができる。グループで話し合う活動では、他の班の声が雑音になり聞き取りにくい場面もあったが、班員の生徒がマイクを持って話しかけることで解決された。資料の共有などは、班員の生徒がオンラインのカメラに向かって資料を提示したり、逆に画面上に写したり、ロイロノート・スクールで相互に送り合って共有した。

また、グループでの発表でも、スライド資料の担当部分を家で練習しておき、本番もスムーズに発表をすることができた。



協働学習の様子

グループ発表の様子

《実験・実習》

理科の実験や実習でも班員の生徒が実況をしながら実験をおこなう場面が見られた。



光の実験の様子

普段から当たり前のようにオンラインを繋げ、一緒にグループ学習をしていると、交流学級の生徒たちも自然とカメラの映り方やプリントの進み具合などのやり取りを当たり前のようにおこない、一緒に活動することができた。

《課題・研究発表》

授業の課題や人権作文の発表などの代表者に選ばれた時は、クラス全体に向けて発表するため、教室に設置されているスクリーンにオンラインの画面を投影し、教室と生徒を繋げた。スクリーンに生徒が映っているので、スライド等の資料は各生徒たちのタブレットに配信をおこない情報を共有した。



教室発表の様子

(5) 生徒交流

《体育大会》

体育大会のマスゲームの練習では、集団から離れたところで、自分のできる範囲でのダンスや太鼓での参加をした。体調面を考慮すると外での活動やダンスは体に負担をかけるが、生徒のできる範囲で一先懸命に参加する姿が、周りの生徒にも良い影響を与えた。



体育大会の様子

《文化祭》

文化祭はクラス合唱をおこなうが、合唱練習や本番は飛沫感染のリスクが高く参加することはできなかった。しかし、オンラインでクラス合唱を聞いた感想やアドバイスを伝えたり、歌詞の意味を調べてクラスで共有したりと交流学級の一員としての役割を果たした。



クラス練習の様子と歌詞のアドバイス

《トライやる・ウィーク》

2年生のトライやるウィークでは、出身小学校で職場体験をおこなった。小学生と直接かかわっての活動はできなかったが、製作物や小学生に向けたプレゼンの製作を同じグループメンバーとおこなった。同じ学

年の他クラスのメンバーであっても、最初にオンラインの繋ぎ方を指導し、困ったことがあれば教師に相談できる環境を整えていけば、生徒同士で活動に取り組むことができた。



打ち合わせ時の様子



小学生へのプレゼンの様子

《校外学習》

1年生では神戸、2年生では大阪の班別学習をオンラインで参加した。校外での学習では、モバイルルーターを繋ぎオンラインでの参加を可能とした。校外での学習のため、音声がかえりにくい場面や画面が揺れたり、光の反射があつたりしたが、普段とは違う場面を友達と一緒に過ごせることは貴重な機会であった。お土産タイムなど中学生同士の会話を楽しむことができた。また、班員が道に迷ったときは、生徒が自宅で検索した道を伝え、目的地までナビゲーションし、教師が思いもつかない形で協力し合う場面が見られた。



班別学習の様子

《修学旅行》

3年生の修学旅行の行先は沖縄で、連日オンラインでの参加は困難であったため、参加するポイントを決めてオンラインを繋げた。1つ目は、ホテルでの沖縄民謡の鑑賞である。教師の下見の段階で、オンラインの承諾を得ておき、当日は、会場の盛り上がりや沖縄の文化を見ることができた。2つ目は、お土産購入の班別行動から空港への集合である。生徒たちの時間の余裕が出てくる時にオンラインを繋げるようにした。



沖縄民謡の鑑賞の様子

《支援学級》

本校の特別支援学級の病弱学級、知的学級、自閉・情緒学級に在籍する全学年の生徒が集まると10人以上となり、交流学級とはまた違う活動と学びになる。

例えば、作業や自立活動の時間には畑で栽培した野菜を収穫・販売、散歩に出かけて気持ちのリフレッシュや公共のルール学習、先輩や後輩への接し方など日常生活に重きを置いた学習となる。病弱学級の生徒

が畑作業に参加することは難しかったため、他の支援学級の生徒達が栽培した野菜を使ってレシピを作成し、交流するきっかけを作った。

また、オンラインの授業だけでは、どうしても人との関わる機会や社会のルールを学ぶ機会が減るため、感染対策を厳重におこなった上で可能な範囲で参加し、人や社会と関わる機会を設けた。



散歩の様子

【Ⅲ】成果と課題

オンラインによって、生徒の体調を考慮しながら、学習や生徒同士の繋がりをつくれた。その背景には、生徒本人の学校に行きたいという強い思いと努力、幼小時代から培ってきた人間関係、新しい人間関係を築きたいという思いがあったからこそ成し遂げられた。

このことより、病弱学級の生徒と交流学級や支援学級の生徒との支え合える人間関係を構築することが、オンラインを活用した学校生活において大前提となる。そして、教師が生徒の人間関係の基盤をつくることで生徒の『繋がり』となる。

ただ、課題点も多くみられる。①オンライン授業のカメラ操作の面では、授業が進むごとに板書を見やすくする工夫、光や発表の声の大きさの調整、実習作業の進捗度合いの確認、協働学習の際の座席移動や生徒同士の資料のやり取りなど細かな配慮が必要となった。②教師の ICT に対するスキルの面では、普段から ICT を頻繁に使わない教員には、苦手意識が高く、操作に戸惑い授業全体が止まってしまうことがあった。③電波・施設・機器等の整備面では、教師側だけでなく生徒側の対応力も必要となってくる。急に電波状況が悪くなり、画面が止まることや接続できなくなることがあるため、自分で臨機応変に対応し、解決する力が必要となる。他にも、それぞれのアプリの特性によって制限されることがある。例えば、Google Meet では、時間を無制限に使えるが、画面を拡大することができず、板書が見えにくい。逆に、Zoom では、時間制限があるが、画面の拡大や音声をクリアにする機能がついている。無制限にするためには、教育用でも有料登録しなければならない費用をどこが出すのかという問題が発生した。さらに、本校は生徒数が多いため、学年全員や全校で一斉にタブレットを使用すると接続できない場面が見られた。④病弱学級の生徒が感じている他との違いから生じる孤立感や病気による制約の面では、

他の生徒の活動を見ているだけの状況や活動したくてもしてはいけないという葛藤を抱いていた。

①②の課題に対しては、今回在籍している生徒が一人だったため、病弱学級の担任が授業に参加し、細かな支援や授業者へのサポートができたが、病弱学級に複数人、また、学年が違う生徒がいる場合は、一人では対応できないため、対処法を考えなければならない。②に対しては、職員研修や会議を通して、ICT の活用力の育成、情報共有する必要がある。③に関しては、学校だけではなく、教育委員会の協力を仰ぎ、情報教育担当や特別支援教育担当に学校現場の現状を伝え、今後の情報教育と特別支援教育の改革を依頼し続ける必要がある。④への対応は、病弱学級の担任が保護者とも連携し、生徒の心身の状況を受け止め、心情に寄り添った声かけや支援をおこなうことで、生徒の精神的な成長を共に歩んでいくことだと考える。

【Ⅳ】終わりに

教育は、「生きる力」を学び、養うことである。支援が必要な生徒も生きる術を学ぶ機会が必要であり、人と人が協力し支え合うことで、成長することができる。

オンラインはあくまでもツールではあるが、教師がそのツールをどう活かし、生徒を繋げていくかが重要である。自宅と教室を繋ぎ、教室という集団の中にその子の居場所をつくるのが教師に求められる。また、生徒本人の「学校生活を送りたい」という強い思いを尊重し、くじけそうになった時や葛藤を抱いている時にどのように励まし、支えるかが重要である。また、病気や障害があるからではなく、一人の人として関わることが、同じ学び舎で過ごす生徒達全員の成長へと繋がり、学びとなる。そして、その関係が続くことで病弱学級の生徒にとって卒業後の生きやすさにも関わってくると考える。

学級担任だけではできることは限られているが、学校組織、教育委員会などの多くの協力を得ることで支援の幅は変わってくる。支援の必要な生徒を中心に、それぞれの立場の大人が、自分の立場でできることを全うし、役割を果たすことで、さらに強い繋がりとなり、生徒の生きる力を育むことができる。

この報告をきっかけに、病気によって学校に行きたくても行けない生徒が、1人でも多く学校生活を送れることを願いたい。